



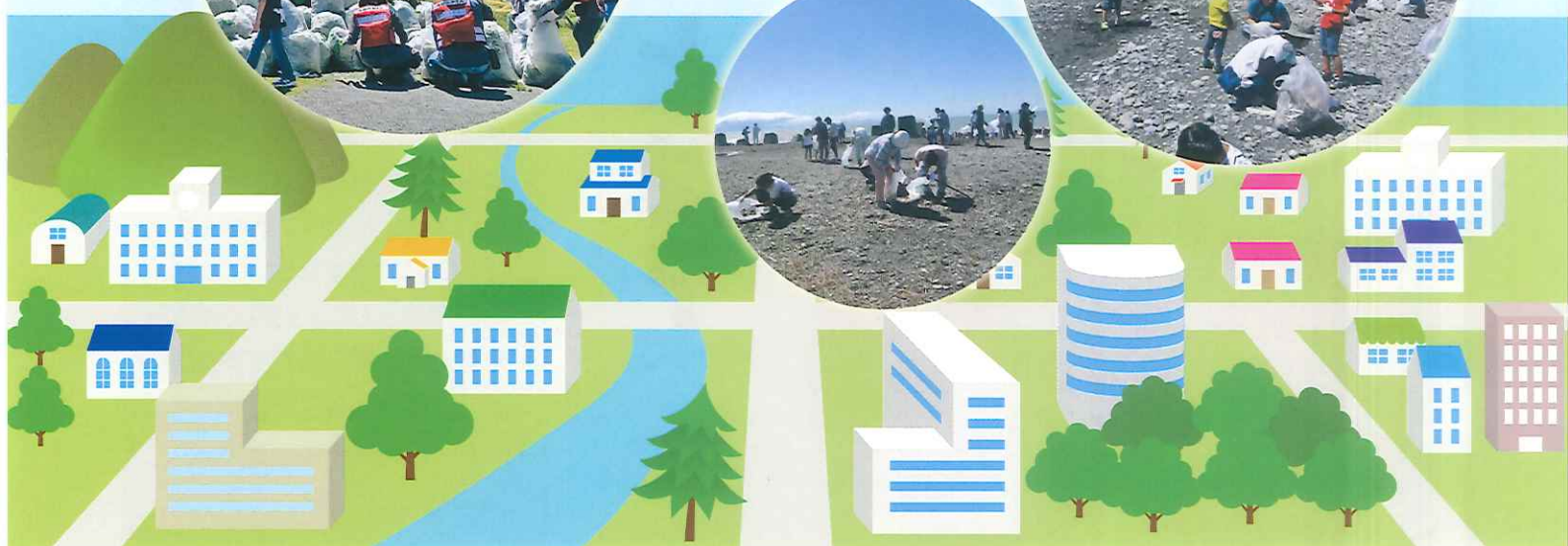
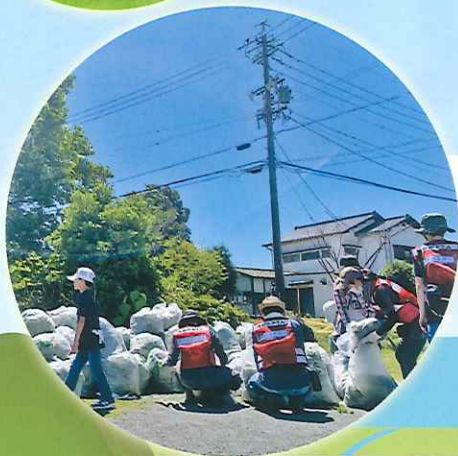
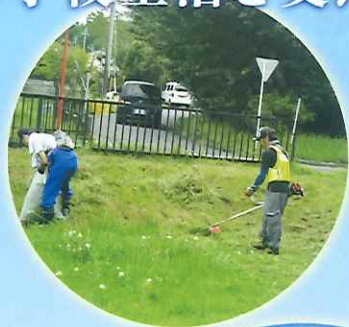
# こだま

第1号

発行日 令和元年10月4日  
発行 大谷小学校PTA  
編集 PTA広報委員会  
表紙 運動会と清掃活動

上級生と下級生、  
先生たちと子どもたち、  
地域と学校…

たくさんの“関わり”が  
学校生活を支えています。







総合的な学習の時間を使い、地域への愛着と誇りを育てるために、静岡市を学習素材として取り上げる学習も展開。歴史文化、食文化、防災etc. を幅広く学びます。また、静岡市の魅力を、英語で発信するための教材も作成。郷土愛と共に、英語力も育みます。

未来を担うための資質・能力

**つながる力**

Social Bond=社会的な絆の育成



**人間性  
学びに向かう力**

学んだ事を、人生や  
社会に生かそうとする力

**思考力  
判断力  
表現力**

未知の状況にも  
対応出来る力

**知識  
技能**

生きて働くために  
必要な力

# 静岡型小中一貫教育とは？

変革の時期を迎えている学校と地域…  
教育のこれからを、徹底深掘りしました

Think Globally,  
新しい時代の  
教育の在り方、  
地域との関わり  
Act Locally.



ググってみよう!! 今日のキーワード

グローカルとは

検索

「グローカル (Glocal)」とは、グローバル (Global: 地球規模の、世界規模の) とローカル (Local: 地方の、地域的な) の2つの言葉を掛け合わせた造語です。「世界規模の視野で考え、必要に応じて地域視点で行動する事」を意味していて、静岡型小中一貫教育の“核”の一つです。

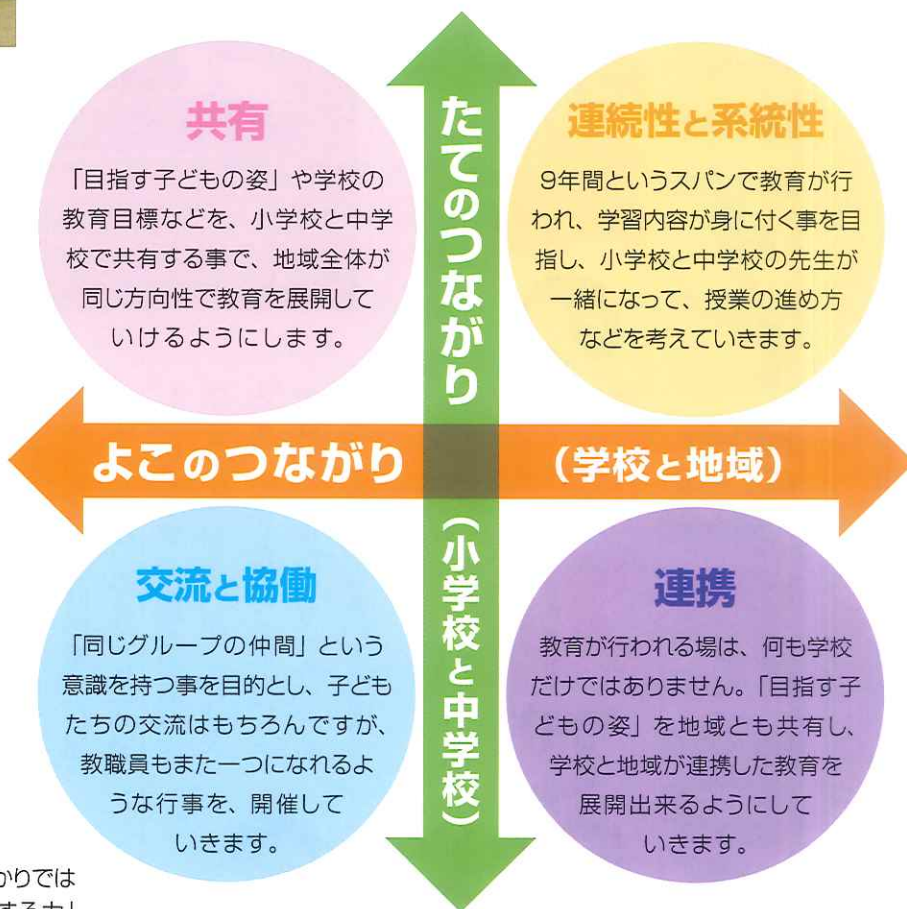




## 静岡型小中一貫教育の“4つの視点”

### ググッとみよう!! 今日のキーワード しずおか学 検索

グローバル人材には、語学力やコミュニケーション能力はもちろん、地域社会が「どんな特色を持ち」「どんな課題を抱えているのか」を、実際に見て、考える力が求められます。英語力の向上と共に、郷土を舞台とした「しずおか学」が取り組まれる背景には、こうした人材を育成する事が目的としてあります。



知識や技術を詰め込むばかりではなく、「考える力」「発信する力」を養う授業が展開されています。

目指す子どもの姿が共有されている事により、そこを意識した活動に参加する際にも、地域活動に参加する際にも、あります。あるいは、子どもたちが地元の活動に参加する際にも、目指す子どもの姿が共有されている事により、そこを意識した活動に参加する際にも、

形で地域の方々も接する事が出来ます。このように「学校単位」や「学年ごと」といった枠組みを超え、「義務教育の9年間」というスパンで捉えていくので、授業にも連続性や系統性が生まれます。それは、勉強というものをその学年で必要とされる知識や技能の習得だけに終わらせるのではなく、それまでに学んだ経験してきた事との繋がりを考えるきっかけにもなります。2020年度からは、『新学習指導要領』が、小学校で全面的に実施されます。そうした変革の時期において、学校のみならず、地域の在り方や子どもたちとの関わりも、見直す時期に来ていると言えます。



教育は変革の時期へ





大谷情報局

# 地域の協力で守られる 子どもたちの場

3年前に始まった放課後子ども教室『おやわんパーク』。安心で安全な体験の場・ふれあいの場の提供を目的に始められたこの社会教育事業は、開始から3年が経った今、どのような局面を迎えているのでしょうか？



**放課後の学校は  
地域と繋がる場**

放課後のグラウンドで、子どもたちが元気に遊んでいる姿を見守っている数名のスタッフ…『おやわんパーク』を支えてくれている、地域ボランティアや保護者の方々です。始めたキッカケは「誘われたから」「人手不足と聞いたから」「日中の仕事が終わってから行ける時間帯だから」と様々ですが、みなさんに共通している事は、御自身の時間を子どもたちのために使ってくださる事。こうした方々のおかげで、放課後の学校に、今日も子どもたちの元気な声が響いています。

スタッフは基本的には見守り重視ですが、子どもたちと一緒に遊ぶ事もあります。もちろん勝負事ともなれば、遊びと言えど大人も真剣!!



新任の先生紹介

教務主任



岡 博美 先生

教務主任としては、大谷小学校が2校目の岡先生。現場との距離がある分、「大谷」として全体を見られる良さがあるそうです。そのため、いかに個々の先生や保護者や地域の方々に支えられているかという事に、改めて気付けたとの事でした。だからこそ、子どもたちに対しても、学校の「支え」となってくれるような頑張りには、しっかりと目を向けていきたいと話してくれました。学校生活を送る中で、生きる事の素晴らしさや人と関わる事の楽しさを感じ、学校を「安心出来る場所」と思えるように、岡先生も教務主任として、大谷小学校を影から支えていきたいと話してくれました。



## 変わらぬ課題は 人手の不足



『おおやわんパーク』が始まった当初より、悩まされていた事がスタッフの人手不足。以前もこの『こだま』で取り上げた際、今後の課題として「十分な人手の確保」という声が上がっていました。3年経った今も、その部分はなかなか解消される事はなく、少ないメンバーで回しているというのが実状です。スタッフ内からは「人が増えれば、子どもたちの出来る事が増えると思う」という声も挙がっており、内容的にも展開していきたい事はあっても、実際はなかなかそこまで手が回っていないという様子でした。

## 地域の力が生み出す 子どもたちの笑顔



『おおやわんパーク』は、子どもたちと一緒に遊んだり、子どもたちを見守ったりする運営スタッフを募集しています。「自分の子どもが利用しているから」と始められた保護者の方や、「地域との繋がりが欲しいから」という思いで始められた、大谷地区にお住まいの方もいらっしゃいます。具体的な活動日や、詳しい活動内容に御興味がある方は、下記の連絡先までお問い合わせ下さい。

お問い合わせ先

— 教育委員会 教育総務課 —

TEL 054-354-2524

## 安心・安全な場を守るために…

子どもたちは学校の休み時間さながらに、ブランコ・鉄棒といった遊具で遊んだり、ドッジボールやサッカーなどのボール遊びをしたり、芝生に座ってお喋りを楽しんだりしています。また、けん玉やフラフープでも遊ぶ事が出来て、それぞれがその時々で楽しみたい事に取り組んでいる様子。そして特徴的な事は、学年に関係なく、そこには「みんなで楽しむ」という雰囲気がある事です。ケガをしたり泣いていた子を見付けると、周りの子どもたちが声を掛けたりスタッフの所へ連れて行ったり

あげたりしている姿から、本来の目的である「異学年との交流」や「子どもたちの自主性や社会性を育む」場となっているようです。だからこそ、こうした場を守り続ける事が、大人たちには求められるのではないのでしょうか。かつてのように、放課後は夕暮れまで自由にグラウンドで遊べた時代とは異なり、今では安全面から『おおやわんパーク』が行われる時しか、子どもたちは放課後に遊んでいく事ができません。この場を守るための人員の確保は、今後も大きな課題として残りそうです。



晴れて外で遊べる日は、高学年男子の参加率が上がります。広い場所で思い切り遊ぶという事は、近所の公園では難しいからかもしれませんね。

2年2組



八木 美穂先生

小さい頃にザリガニを捕まえて来た思い出があり、大谷を「馴染みのある場所」と話してくれた八木先生。以前と変わらない部分もある一方で、道が広くなったり住宅地が増えたりした部分もあるので、もっと大谷地区の事を知らないから関係性を築きたいと語ってくれました。

1年1組



切石 千代江先生

子どもたちと言葉を交わし、対話の関わりを大切にする切石先生。温かい眼差しと、いつも子どもたちに対して「大丈夫だよ」と声を掛けて、安心感を与えてくれる姿が印象的です。今後は、保護者や地域全体についても、より知っていきたくと話してくれました。





だから

# 運動会を開催するのです。

本番の勝ち負けばかりが結果じゃない！



年度内で最初の大きな行事であり、「あさかゼブラン」の第1ステージの集大成」と位置付けられる運動会には、様々な「ねらい」や「効果」があります。今回は、その裏側にスポットを当てて、運動会を通して得られた「成長」について取材してみました。

## 行動として表れた頑張る気持ち

「令和初の運動会担当」を任されたのは、5年1組担任の袴田生先生。「大役を任されたので担当に決まっただけはとても気が入った」と言う袴田先生を筆頭に、運動会に向かっていく子どもたちの気持ちの高ぶりは、当日が近づくにつれ、学校全体としても感じられるようになったそうです。競技の練習をしている姿からはもちろん、5・6年生が前日に準備する際、自分たちで声を掛け合っている様子も見ていました。



特別支援教育支援員



永倉 亜弥先生

いろいろなクラスに入り、どの子どもも楽しく学校生活を送れるためのサポートをしている永倉先生。自分で頑張ろうとする気持ちを大事にし、出来た時はたくさん褒め、困っている時に助けを出す事で「子どもたちが安心出来る関係作りをしていきたい」と話してくれました。



3年1組



山崎 郁歩先生

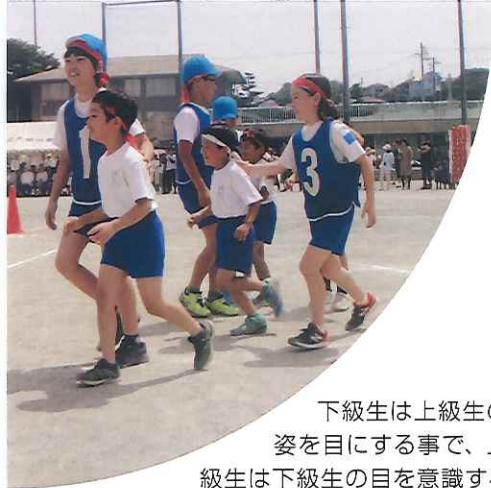
教員1年目のフレッシュな山崎先生。どの先生も、子どもたちと良い関係を築けている姿に、刺激を受ける毎日だそうです。それだけに、当たり前の事を当たり前にやり、お互いに刺激し合い、共に成長していけるクラスにしていきたいと語ってくれました。



## 運動会を『学び』や『成長』の場に

今年は4月末から5月の初めにかけて10連休があるなど、練習や準備をするには日程的に難しかったようで、袴田先生からも「表現運動に時間を取られ、ムリデ競争などの練習時間を取るのが難しかった」という課題点が挙がりました。5月末開催という日程が、難しさを生む側面はあるのかもしれませんが、その

一方で「学校全体や学年ごとに取り組む内容が多いため、他学年と一緒に取り組めるような内容を、もう少し増やしたい」というお話もありました（数年前には3年生と4年生のソーラン節に、他の学年が参加した事がありました）。準備面においても競技面においても、運動会を通して自主性を養っていった子どもたち。だからこそ、他学年と共に何かを取り組む機会があれば、運動会という場が互いに学び合い、そして教え合う場となるのかもしれない。



下級生は上級生の姿を目にする事で、上級生は下級生の目を意識する事で互いに成長合っています。



学校行事の成功の影には“地域の協力”があつてこそ。運動会では父親委員会を中心に、早朝のテント設営や終了後の片付けで、大変お世話になりました。



## 改めて運動会の『本質』を考えると…

今年の運動会は、いくつかの変化がありました。代表的な例が、恒例種目とも言えるリレーや綱引きをやらなかった事——「運動会は、日頃の体育で取り組んでいる事の延長線上にあるものなので、体育でやっている事の発表の場というのが、運動会の本来の位置付け」と袴田先生。確かに見る側としては、「子どもたちの三所懸命な姿を見たい」「（勝つ喜びや負ける悔しさなどの）感動を共有したい」という思いもあるのかもしれませんが。ただ、

大きな行事の一つであるけど、一年間の集大成という訳でもなければ、魅せるためのショーという訳ではないのも事実。クラスが一丸となってバトンを繋ぐ姿や、全力で綱を引く姿も素晴らしいですが、チームワークを育むための取り組みは、何も運動会でなければ出来ないものでもありません。運動会の本来の目的と照らし合わせて考えると、子どもたちのそうした姿は、年度内に行われる他の行事で見させてもらうのも良きですね。

拠点校初任者指導員



瀧戸 真弘先生

毎週水曜日に大谷小学校へ勤務し、新規採用の先生を中心に、具体的な授業の進め方や、「教員とは？」という心得に関する指導を行っているそうです。優しいオーラたっぷりの瀧戸先生の指導の下、新任の先生もまた、子どもたちと共に大谷小学校で育っていくと思います。

事務員



諏訪部 康乃さん

前職が一般企業の事務員だったので、学校の事務室に来る子どもたちが、名前と要件を大きな声で元気良く伝えてくれる事に、気持ち良さをを感じる毎日だそうです。要件を伝えやすい雰囲気作りや、子どもたちに気持ち良さを感じてもらえる接し方を、心掛けています。





## Special Interview

何事も「楽しむ」感覚で、笑顔の素敵な先生です

# 豊嶋 貴子 先生

教育の現場は今、大きな変革の時期にあります。対応力が必要とされる中で、学校には、そして大谷地区には、何が求められているのでしょうか？新しい教頭先生に、じっくりと聞いてきました。

### 大谷地区の「良さ」と「課題」

2020年度から『新学習指導要領』が小学校で全面实施され、2022年度には『静岡型小中一貫教育』が静岡市で「齊スタート」：そんな学校教育の「変革」の時代に、大谷小学校に新たに着任された教頭先生——「大谷地区の方々には、団結力が強い印象があります。保護者もPTA活動に対し、当たり前のように協力してくれる。自治会の方々も、イベントの数は多いけど、組織がしっかりといるから、とても心強い」というのが、まず最初の印象。学校と地域のつながりを、より強化していくこれからの時代を迎えるにあたり、そこは安心材料といった所でしょうか。一方で、学校主導というのが多いのも事実です。地域からの発信により、何かしらの新たなアクションが起こることというよりは、これまでに踏襲されてきたものを「守る」「続ける」といった所で、その組織力が発揮されています。それが大谷地区の良さでもあり、今後の課題でもあります。そういった点では、大谷地区も学校との「関わり方」を見直す時期に来ていると言えそうです。

### 「協力」と「負担軽減」の同時進行

小学校と中学校の関わり方、学校と地域の関わり方。この「たて」と「よこ」の関係性を強化していく上で、避けては通れない問題があります。負担の軽減です。「世の中の流れに呼応するように、学校の先生方の『働き方改革』は、今年度の大きなテーマの一つです。いかに残業を減らせるのか、いかに負担を軽減しているのか……これは非常に大きな課題です」と、教頭先生。そして、学校がそこ（働き方改革）に取り組んでいる

以上、保護者や地域の方々に対しても、極力負担を軽減していく方向で考える必要があるとの事でした。「先生方の負担軽減に、地域人材の活用は必要不可欠です。地域には、様々なノウハウを持った方が、たくさんいらっしゃいます。そこを学校教育に活かしていく、地域の方々も無理なく出来る仕組みをどう作っていくのか……まだまだ手探り状態です」——学校や地域で行われる行事然り、放課後の「おおやわんパーク」然り。地域の方々の協力を仰ぎつつ、お互いに負担は軽減していくという大きな課題は、まさに学校と地域が一体となって取り組む課題と言えそうです。

### 新しい時代に求められる「力」

時代と共に、生きていくために必要とされる力も変化し、学習指導要領が変われば、それを教える先生にも変化が求められます。「大切な事は、教科書を教えるのではなく、教科書で教える事」という言葉通り、相手の感覚や目線に合わせ、出来る限り生活に密着した「経験」という形で伝えられるように工夫されているようです——「課題を乗り越えるためのヒントは、そこら中にあります。それを探す事を、ゲーム感覚で楽しめるのがいいです」——答えを教えるのではなく、答えに繋がるヒントを考えるための「キッカケ作り」といった所でしょうか。教育の展開、学校の在り方、地域との関わり方、そして働き方……様々な要素で変化が求められる時代だからこそ、こうした「多面的な視点で考える力」が必要とされます。「これまで」と「これから」、「踏襲」と「改革」。両者のバランスの中に、大谷地区の新たな在り方のヒントがありそうです。